HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	選後の感想
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報
Issue Date	1936
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77696
Type	article
File Information	A010_02p139-141.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第二回「文藝賞」入選・短歌・俳句

短歌

鍬

上條玲兒

論ふ何のあらむや秋待ちて、春準備する鍬はつとめぞ。

俳句

鍬

山本勇

土塊に光れる鍬や草いきれ



選後の感想

芝亭

今ここで發表されて居る此懸賞文藝作品の披露を今行ふ事には多少の無理が含まれて居る様に思ふ。と云ふのは應募者達が實際に筆をとり始たのは、恐らく去年の六月以前であつたと思ふのであるが、去年の六月以前と今日との間には時間的な經過は必ずしも長くはないけれども、私等の置かれて居る環境や心境には隨分大きな距離がある。

支那事變による深刻な國民的體驗を經て來て居る今日、又國民精神動員下にある今日から見れば、ここに選出した事變前に書かれたものが、そんな意味から多少不滿に思はれるのは致し方ない事である。

今度の作品には一般に體驗の中に生きて居る鍬がよく描き出されて居たと思ふ。概念化し枯死した鍬や遊惰なる夢に描く鍬は誰れでも書く事が出來るものである。手脂で底光りのする鍬の柄を愛撫する人の書く鍬には體驗の躍動が現はれて居る筈である。

題が鍬であるからとて鍬に關する事が作品の中軸をなす可きであるとは私は思つて居ない。けれども鍬と題する以上、何かの形式に於いて其題に內容が或る程度迄則して居る事は必要であらう。鍬と云ふ題に殆ど全然無關心の作品もあつたが、其はその意味から入選には不利の立場にあつた事は勿論である。入選した小說は鍬と云ふ題に最も則して居ると云ふ點に於いても優秀であつた。私は諸君の體驗

の中に在る鍬そのものを諸君が此機會に改めて凝視する事を何よりも第一に望んだのである。それはそれ丈でも無駄ではないと思つたからである。

生產用具としての鍬の力學的研究や經濟學的研究の外に鍬の云はば社會性や鍬に對する意志や感情に關する方面は藝術的に色々に同作化する事が出來るであらう。凡そ日本の農民で、農民と云ふに値する程の農民ならば、鍬に對する體驗のないものはないであらう。

鍬と共に起き鍬と共に寢ね、喜びも悲しみも鍬と共にする農民の生活は云はば鍬の生活である。鍬に關する偉大なる詩や小說があつてよい筈である。小農經營を原則とする日本農民の生活を一つのもので象徵化するならそれは鍬であらう。

詩や俳句に應募者が少なかつたのはさびしかつた。

概して云ふならば此度の第二回懸賞應募作品は第一回のものに比して明らかに全體としての水準は少し高くなつたと思ふ。

小說らしい小說、詩らしい詩を書く爲には、余りムキにならぬがよいと思ふ。農民の生活は農民が描き出したがよい。そして農民らしい表現形式に於いて、藝術の表現形式の最高なるものの固定したものはないと思ふのであるが、次の事丈は云へると思ふ。鍬の話は鍬を使ふ人が其口で話す時一番眞であるに違いない。ウソは駄目だ。と云ふ事である。

近頃山村暮鳥の「雲」を讀んだが、隨分心に迫るものがあつた。このアヂヤ的詩人はよき詩をつくる事よりもよき詩人となる事に精進して居たらしい。素朴な表現の彼の詩は彼の體臭の如く間違いなく彼自身から發散されて居る。

× × ×

× × ×